

第6回日本消化管 Virtual Reality 学会参加報告

札幌医科大学附属病院 大橋芳也

札幌医大病院の大橋です。

毎日の雪かきに追われ、北国の冬にうんざりしているこの頃ですが、皆様いかがお過ごしでしょうか？南は福岡、雪一つない小雨が滴る中、1月20日福岡エルガーラホールにて開催された第6回日本消化管 Virtual Reality 学会に参加してきましたので報告させていただきます。

本会は、消化管のコンピューター断層画像診断に携わる者の研究発表、知識の交換等を促進し、学術の発展及び人類の福祉に寄与することを目的とした学会です。小樽掖済会病院の平野理事が中心となり CT-Colonography をメインテーマに消化器内科医、放射線科医、放射線技師が参集し意見交換が行われました。シンポジウムでは、来年度より医師の働き方改革が始まることから我々放射線技師サイドのタスクシフトの進捗や課題について様々な議論がなされました。すでに大腸 CT におけるカテーテルチューブの挿入を放射線技師が行なっている施設をモデルケースとし、実際の運用に至るまでのフローまでを拝聴しました。稀ではありますが、過去にチューブ誤挿入などのトラブルもあり、医師を交えたトレーニング (OJT) を基より患者さんとのコミュニケーションの必要性が問われていることを実感しました。現場で混乱を招かないようスタッフ間の共通認識、マニュアル整備は重要であると思いました。実際のワークステーションを使った CTC のハンズオンでは、放射線技師、内視鏡医師と放射線

科医からそれぞれの立場で読影のレクチャーを行なっていただき非常に勉強になりました。1次読影（スクリーニング）から、腫瘍の鑑別、内視鏡像との対比、壁深達度評価、表面形状や腸管外への遠隔転移の可能性など専門的視点での多角的な読影は、まさしく餅は餅屋、プロフェッショナルなお仕事であると感じました。今回、私は、一般演題において“右側結腸癌術前 CT における Double-bolus tracking 法を用いた 3D-VR の画質評価”という演題タイトルで発表して参りました。会場からのご質問をいただき今後の参考にさせていただきますと思います。本学会には初参加させていただきましたが、私たち放射線技師と医師が構成する学会はそれほど多くはないため、意見交換できる場は大変貴重だと感じました。

会終了後の懇親会では、博多名物のもつ鍋を囲みながら交流を深めることができ有意義な時間を過ごすことができました。道民には馴染みがない屋台にも立ち寄り、夜風にあたりながらすすった博多ラーメンは格別でした。



博多(中洲) 屋台にて